



黄緑色で皮ごと食べられる「みどりの雫™」を開発 (2025年8月品種登録出願)

愛知県のイチジクは産出額全国第1位で、果皮が赤い「榊井ドーフィン」と「サマーレッド」が主に栽培されています。

当场ではイチジクの消費拡大と産地活性化を目指し、2013年から食味の良さと、果皮色など外観に特徴のある新品種の開発を行ってきました。

その結果、2025年、果皮色は黄緑色、「榊井ドーフィン」よりやや小ぶりですが、糖度が高く食味の良い「愛知イチジク1号(商標出願中:みどりの雫™)」を品種登録出願しました。

「みどりの雫™」の最大の特徴は、手を汚さずに皮ごと食べられることです。また、甘味が強く、生食だけでなく、果実を丸ごと使った生菓子など、新たな消費喚起が期待されます。

また、イチジクの重要害虫であるアザミウマ類による被害はほとんどなく、高温による乾燥や急な降雨による品質低下も少ないため、露地栽培でも安定した収穫が見込めます。2030年頃から本格的な出荷が始まる予定で、イチジクのブランド力の強化と生産拡大を見込んでいます。

(園芸研究部)

トマトの茎を潰して収益UP！！－裂果対策技術の開発－



トマトの裂果

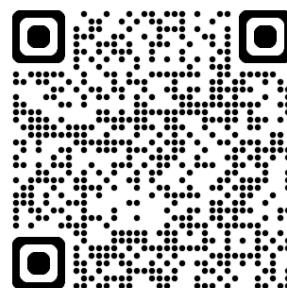


果梗捻枝の様子

第1果房から第3果房までの裂果率と10aあたり収益

試験区	裂果率	裂果なし 平均果重	9～10月 出荷収益※	無処理との差
	%	g	千円/10a	千円/10a
捻枝2回	9.7	106.4	759	+487
捻枝1回	29.9	113.8	640	+368
無処理	70.3	111.8	272	—

※人件費、ペンチ代は経費として計上済み



YouTube公開
二次元コード

トマト促成長期栽培において高温による裂果が問題となっています。この対策として「果梗捻枝」を行うことで、裂果率の大幅な減少に成功しました。

「果梗捻枝」とは、果実の肥大が終わり着色が始まる直前の時期（白熟期）に、トマトがついている茎（果梗）をペンチ等で潰す技術です。トマトへの養水分の流入を物理的に減少させることで、裂果を抑制することができます。

「桃太郎ホープ（台木「グリーンフォース」）」を用いて、果梗捻枝を行わない無処理区、白熟期に果梗捻枝を1回行う捻枝1回区、1回目の3

日後に再度果梗捻枝を行う捻枝2回区を比較したところ、無処理区の裂果率が約70%だったのに対し、捻枝1回区は約30%、捻枝2回区は約10%にまで減少しました。平均果重は小さくなる傾向にあるものの、裂果率が減少することで出荷果数が増え、収益は増加しました。なお、品種によっては落果や病気の発生のリスクもあるため、小面積から取り組むことを推奨します。

現在、現場フィールド活用型イノベーション推進事業において、作業性が向上する果梗捻枝専用器具を開発中です。

（東三河農業研究所）



露地小ギク、3色揃って8月旧盆にきっちり咲かせます！

定植日からの電照による切り花品質



試験年度	品種 (色)	定植日 (月/日)	電照日 数(日)	高単価期 収穫率* (%)	切花長 (cm)	切花重 (g)
2024	めざめ (白)	5/6	40	71.0	93.2	64.4
2024	ひでよ (黄)	5/6	40	71.7	106.7	61.1
2024	紅奴 (赤)	5/6	40	47.8	103.2	55.2
2025	紅奴 (赤)	5/12	37	89.4	99.7	52.3

*: 全体収穫量のうち、7月30日から8月6日の期間の収穫割合

「めざめ」「ひでよ」「紅奴」を8月旧盆前に出荷するための電照技術

- ・LED電球設置位置：定植時に茎頂部から1mの高さに設置する。
- ・LED電球の種類及び設置間隔：白色LED（8W）を1.8m間隔に設置
- ・電照時間：22時～翌2時（4時間）
- ・電照日数：定植日（5月上中旬）から40日程度の電照を行う。
ただし、「紅奴」は他の2品種より定植をやや遅らせる。

露地小ギクは中山間地における花きの重要な品目です。しかし、近年の夏季の異常高温により花芽分化が早まり、慣行栽培では開花が前進し、最需要期の旧盆に合わせた高単価期（8月5日前後）の出荷の妨げになっています。

そこで、LEDを用いた電照によって花芽分化を抑制し開花を遅らせ、8月旧盆前の出荷を可能にする電照技術の確立に取り組みました。

慣行栽培で7月に自然開花する白・黄・赤の6品種を用い、5月6日定植（点灯開始）、40日電照の作型で比較した結果、白色品種「めざめ」、黄色品種「ひでよ」は、高単価期の収穫率が

70%以上でした。一方、赤色品種「紅奴」は「めざめ」「ひでよ」より開花が早かったため、定植をやや遅らせ、5月12日定植（点灯開始）、37日電照とすることで高単価期の収穫率は89.4%となり、3品種の開花期を揃えることができました。

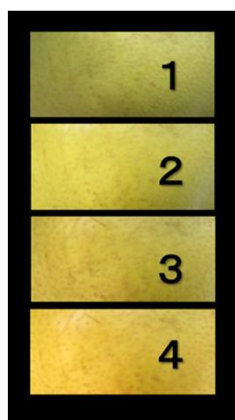
また、3品種いずれも平均切り花長は90cm以上、切り花重は50g以上あり、切り花品質も良好でした。

これらの品種と電照技術の組合せにより、8月旧盆前の安定出荷が可能となり、小ギク農家の収益向上とともに、中山間地の農業振興への貢献が期待できます。（山間農業研究所）

本研究は「令和6年度及び7年度ジャパンフラワー強化プロジェクト推進」で実施した成果です。

「瑞月(ブランド名:あいみずき)」の有袋用カラーチャート(色見本)が完成！

ナシ品種「瑞月」は果実に袋掛けする有袋栽培と、袋掛けしない無袋栽培が実施されています。適期出荷を行うためには、果実の収穫適期を色で判断するカラーチャートが役立ちます。これまで活用されてきた無袋用に加え、新たに有袋用を作成しました。



県内ナシ生産者を対象とした有袋用カラーチャート調査では、9割以上の方から「同じカラーチャート値の果実群では食味が揃っている」、8割近くの方から「異なる値の果実群間では食味や食感に違いがある」との回答があり、その有用性が明らかになりました。

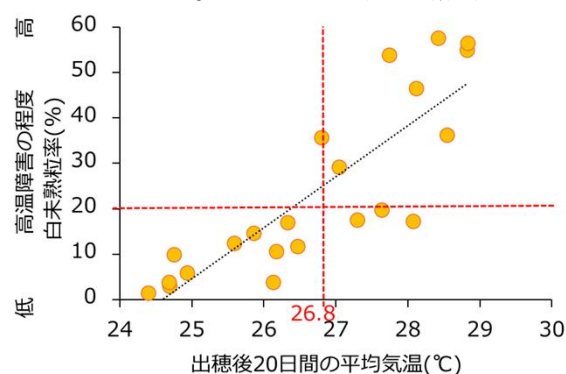
(園芸研究部)

「瑞月」有袋用カラーチャート

中山間地水稻作でも出穂後20日間の平均気温に注意！

近年の夏季高温により、中山間地域向け良食味水稻「ミネアサヒSBL」でも白未熟粒の増加が問題になっています。「ミネアサヒSBL」の玄米品質と気温との関係を調査したところ、「出穂後20日間の平均気温が『26.8℃以上』で白未熟粒率が20%を超えることが確認できました。

現在、追肥をはじめとした対策技術の開発に取り組んでいます。(山間農業研究所)

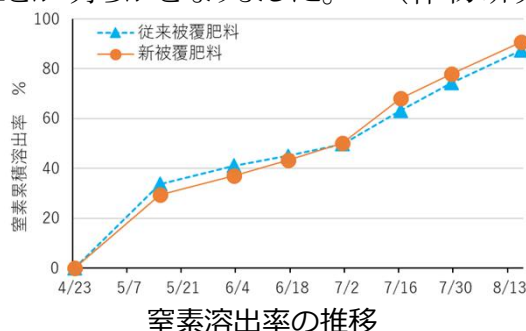


出穂後20日間の平均気温と白未熟粒率との関係

プラスチック使用量を削減した肥料による水稻全量基肥栽培技術

水稻作では、プラスチック等で被覆し窒素成分が徐々に溶出する肥料を用いた、全量基肥栽培が主流です。環境への配慮からプラスチック使用量を削減するとともに、溶出後被膜殻の水田からの流出を抑制するため、被膜殻が壊れやすく水に浮きにくくした新たな被覆肥料が開発されました。

移植栽培で従来肥料と比較したところ、肥料の溶出率及び水稻の生育や収量・品質に差がないことが明らかとなりました。(作物研究部)



窒素溶出率の推移

本研究は「令和6・7年度全農肥料委託試験」で実施しました。

異常高温に負けない！ ～園芸ハウスのドローン活用～

園芸ハウスへの遮熱剤の塗布は、有効な高温対策のひとつです。当场では企業とともに、塗布作業が困難な軒の高いハウスや連棟ハウスでのドローンによる塗布技術の開発を進めています。

現在、ドリフトを低減し従来より少量で同等の面積に塗布できる資材を検討しています。

2026年度は場内で試験を行い、2027年度以降の現地実証を目指します。(園芸研究部)



ドローンを用いた園芸ハウスへの遮熱剤の塗布

本研究は「あいち農業イノベーションプロジェクト」で実施中です。